

2019年度第2回霞ヶ浦自然観察会実施結果報告

「柳絮って何？ 河畔林の植物と遊水地」を実施しました。

日時：2019年5月25日（土曜日） 午前9時から午後3時35分まで

場所：下妻市小貝川ふれあい公園と筑西市母子島遊水地

参加者：38名

結果： 行きのバスの中で、小貝川は那須烏山市の丘陵地を源流に約111km流れて、取手市で利根川に合流する川で、その標高差は150m程で、非常に河床勾配の緩い川であること、昔は下妻の南で、鬼怒川の分流が小貝川に合流していたことから、流れの弱い小貝川がここで大きく蛇行し、河川敷が広がっていること、小貝川と大谷川が合流する地点で、昭和61年8月の水害により5集落が水没し、復旧するにあたり、今後は水害に会わないように高台を造りそこに集落を移転し、跡地を水害対策のため遊水地にしたことを学びました。

小貝川ふれあい公園の北駐車場で講師の福田良市先生を紹介の後、早速、堤防から降りて河畔林の林縁から林内へと入り、植物観察を開始しました。河畔林の下草に泥が付いていることから、4日前の降雨で川の水がここまで、上がってきたことがわかりました。林縁にはクワがありましたが、残念なことにたくさん付いている実は、未熟の状態でした。マメ科のサイカチがあり、たまたま手の届く所にその実のさやが1つだけありました。サイカチの種子はサポニンを含むため、昔は洗剤として使われていたことが説明されました。また、葉を千切るとプーンとゴマのにおいがする、その名もゴマキという植物もありました。

林内に入るとマルバヤナギの木が何本かあり、早速、柳絮の現象が見られました。柳絮は綿みtainな毛が付いているヤナギの種子が、風で飛ばされて舞う現象です。

河畔林を抜けると、林縁のマルバヤナギから風に乗ってたくさんの種子が飛ばされ、雪が舞っているようでした。参加者が舞っている種子を手で取ろうとすると、手を動かしたことによる風で、種子は手から離れて行き、なかなか取れませんでした。地面は落ちた種子で雪が積もったように真っ白でした。最後になり、熟した実をつけたクワに出会い、大人はみんなで採って、懐かしく味わいましたが、子供さんは最後まで手が出ませんでした。

午後に母子島遊水地へ移動し、バスの中で話をしました遊水地の越流堤を見学しました。そして、遊水地内にある湛水池に移動して、周囲に生えている植物を観察しました。この池は遊水地の施設として掘った池なので、元々植物はなく、今ある植物は自然に入ってきたものです。マルバヤナギがあり、これも柳絮で飛んできた種子が定着し、成長したものであることを知りました。

幻想的な柳絮の現象が見られ、多くの参加者が満足した観察会でした。

観察した植物：マルバヤナギ、クヌギ、エノキ、ゴマギ、サイカチ、クワ、スイカズラ、キツネアザミ、オニスゲ、クサヨシ、フジバカマ、ミゾソバ、ウシハコベ、アマチャヅル、カキドオシ、コモチマンネングサ、ツタ、コウヤワラビなど146種

次に観察会の様子を紹介します。

(腰塚昭温)

小貝川ふれあい公園の河畔林



柳絮



マルバヤナギの種子
(柳絮の元です)



植物観察の様子



地面は落ちた種子で積雪の様です

母子島遊水地



越流堤を見学



湛水池での植物観察